

2012年サケ・マス類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量																
	漁獲(生産)			加工 塩蔵	輸入 生冷	輸出 生冷	東 京			缶詰	消費支出		年末 在庫	日露 協定	秋 サケ	北海 道	本 州
	サケ	マス	養ギン				生	冷	塩蔵		生(円)	塩(円)					
23	135.8	10.8	0.1	88.5	258.4	22.4	6.5	32.3	10.4	2.6	2,886	1,520	107.4	8.3	128.9	114.6	14.3
24	130.7	5.5	9.2		288.7	21.6	8.1	35.4	10.8		3,135	1,579	106.0	9.6	121.1	107.0	14.1
%	96	51	7,931	0	112	96	125	110	104	0	109	104	99	117	94	93	99

年	価 格									
	秋 サケ	北海 道	本 州	輸 入	輸 出	東 京			消費支出	
						生	冷	塩蔵	生(円)	塩(円)
23	482	477	519	614	299	940	663	789	4,035	1,909
24	471	466	516	537	285	799	465	680	4,254	1,937
%	98	98	99	87	95	85	70	86	105	101

漁 獲 量

24年の北洋サケ・マス漁業は、ロシア200海里枠が中型船3,796トン（前年：2,628トン）、小型船3,275トン（前年：2,928トン）で中型船、小型船とも増加した。入漁料は中型・小型とも304円/kgで前年（304円/kg）並みであった。また、割当枠はベニ、白とも増加した。またオホーツク建マスは不漁で半減以下の漁獲となった。

日本200海里枠は、2,562トンで前年（カラフトマス主体2,694トン）をやや下回った。

秋サケ沿岸漁獲量は、北海道3,454万尾（前年：3,426万尾）、本州508万尾（前年：474万尾）、トン数では北海道10.7万トン（前年：11.5万トン）、本州1.41万トン（前年：1.43万トン）であった。北海道、本州とも低調であった前年を引続き下回るか前年並みの低調さであった。

価格は、北海道での漁が漁期の遅れもあって本年も当初から低調で、イクラ在庫の払底の中で雌の高騰もあって終盤はややだれたものの総じて周年高値が顕著であった。しかし水揚げ減から漁獲金額は再度500億円を割った。また本州でも網数は前年よりやや増加したものの思ったよりは捕獲尾数が伸びず低調で、結果的に前年並みの水揚げに終わり、価格も北海道の高値を受けて高騰が目立った。

魚体は、北海道3.10kg（前年：3.35kg）、本州2.77kg（前年：3.01kg）で、今年は北海道、本州とも前年より小さく、昨年以上に小型化が目立った。本州では3kgを割った。

国内養殖銀ザケは、東日本大震災による被害を受けて9,200トン（前年：0.1千トン）であった。

輸 出 入

24年のサケ・マス類輸入量は、28.9万トンで前年（25.8万トン）を上回った。

本年、天然ではベニが前年を引き続き下回ったが、養殖物ではギンが増加、トラウトも増加であった。また、冷凍フィレーは引続き前年を上回った。その結果、総輸入量は前年を上回った。

天然物の国別輸入量は（全てのサケ・マス類、フィレーを除く）、米国9.7千トン（前年：1.6万トン）、カナダ1.2千トン（前年：1.7千トン）、ロシア2.5万トン（前年：2.8万トン）

でロシアが増加したが、カナダが本年も昨年に引き続き大幅減少、米国もアラスカベニの低調さもあって本年も減少した。

また、1999年初めて米国をぬいてトップにたったチリを始めノルウェー等各国からの養殖系サケの輸入は、既に天然物を遥かに凌駕しており、末端消費も養殖系のギン、トラウト、アトラン主体の流れになっている。本年の国別輸入量はチリ14.9万トンで前年(12.9万トン)を上回った。ノルウェーは3.1万トンで、前年(2.6万トン)を上回った。またニュージーランド(生・冷)、デンマーク(生・冷)、オーストラリア(生)等からの輸入は引続きみられているが、量的にはチリとノルウェーからが圧倒的に多いことには変わりはなく、その傾向はますます強くなっている。

輸入価格は、537円で養殖銀ザケの大量搬入もあって下落し、前年(614円)を下回った。

また、近年まとまった輸出がみられていた秋サケは、国内生産の減産と原発事故の影響で中国への減少が顕著にみられ、1.1万トンと前年(1.5万トン)をまだかなり下回っている。

輸出先は、依然中国が多いがそのシェアは53%に落ちた。続いてタイ5,627トン(前年:3,324トン)、ベトナム4,103トン(前年:3,346トン)、韓国20トン(前年:72トン)、台湾2トン(前年:333トン)でタイの躍進が目立った。

また輸出価格は、本年も国内価格の堅調さもあつたが、前年(299円/kg)をやや下回る285円/kgであった。

総供給量

本年は建てマスが大幅減少、秋サケやや減少、養殖ギン大幅増加、輸入増加した結果、総供給量は、前年を上回る51.7万トンとなった。本年もイクラ在庫の払底、秋サケの低迷等があつて国産秋サケは堅調であつたが、輸入の養殖系の大量搬入もあつて秋サケを除くサケ類の価格は軟調相場が顕著であつた。年末在庫量は、供給量が多かつたものの、銀ザケ主導の安値展開が顕著で消化も順調に進んだ結果、昨年並みの越年在庫となった。

	23年	24年	対比(%)
総供給量	468,450	517,533	110
沖獲漁獲量	8,250	9,633	117
秋サケ漁獲量	128,900	121,100	94
建マス漁獲量	7,500	3,100	41
銀ザケ漁獲量	100	9,200	9,200
輸入量	258,400	288,700	112
期首在庫量	88,000	107,400	122
輸出	22,400	21,600	96

消費地入荷量と価格

サケの東京消費地入荷量は、生8.1千トン(前年:6.5千トン)、冷3.5万トン(前年:3.2万トン)、塩1.1万トン(前年:1万トン)であった。

本年の入荷の特徴は、輸入物の増加、北海道・三陸の秋サケ漁の不振が本年も続いたが、秋サケ輸出の停滞で国内に向けられたことや震災で前年生産が皆無であつた銀サケの生産回復、依然堅調な生鮮需要もあつて、生鮮の入荷は増加した。冷凍原料もチリ銀の国内搬入の増加を受けて消費地でも増加、塩蔵はほぼ前年並みで推移した。

平成年代に入って順調に伸び定着してきた生秋サケは、切り身、生フィレーでの販売が全

国的に定着しているが、本年も輸出向けの停滞もあって、前半に生フィレーの国内消化にむけられた。こうした流通サイドの販売促進の結果は家計支出にも反映され生は数量・金額とも増加した。

価格は、生799円（前年：940円）、冷465円（前年：663円）、塩680円（前年：789円）で生鮮・冷凍・塩蔵とも下落幅が大きかったが、主な要因としてはチリ銀の大量搬入による価格の下落が、他のサケ類（国内銀、紅、時等）にも影響を及ぼし、産地、消費地のサケ価格は不振の秋サケを除けば、総じて下落傾向の1年であった。